

社会福祉事業法制定時の周辺に

於ける恒川教授との出会い

大 橋 俊 有

(京都文教短期大学長)
家政学 園長

民生安定所という名は京阪神以外では通用しないで、今となつてはそんなものもあつたのかと思われるに違いない。

それもその筈で社会福祉事業法制定の昭和二十六年の一年程前に現在の福祉事務所の内容のものが、京阪神ではこの名で一足先に発足したのである。

職業安定所は既にあつたが、それに対比した名として、民生行政の中に自主的に命名されたのである。

三都市では労働者諸君が職安闘争とならんで民安闘争とも呼称した時代である。

その頃は終戦後の米軍政時代で、何もかも軍政部の指導乃至助言があり、或いは命令さえもあつた頃である。

僕は京都市社会課に大学卒業後勤務し、終戦後昭和二十三

年には民生局庶務課長として荒廢した市民生活の立直し、大袈裟にいえば、社会福祉事業の緊急的近代化を行政面に正面に引き受けることになった。

何回も京都だけではなしに東京の京橋付近にあつたGHQの民生部へ呼ばれたり、交渉に当る役割を仰せつけられたのであつた。

考えてみると戦時中に於ける京都市の社会福祉の陣容は少いもので、皆集つても一部屋に入れたのだから、臨時職員を含めても百人に満たない構成であつた。

特に今の生活保護法の前身である救護法に至っては携わる職員はわずかに内勤の者が十名程度であつた。

今、京都市の民生局に勤務するものが生活保護関係だけで

も約四〇〇名であることを思えば、隔世の感がある。

その時代に故塚本善隆博士が、「君、恒川君を知っているだろう。大学や専門学校も一緒に気心もよく解っているだろうから、社会事業をやらせたいと思う。何とか役所にとらなにか。」とお話で、速刻に来て頂くことになったのである。

正直に言って学校は僕が先輩であるが、卒業と入学が三年違うということで学生時代が一緒でなかった。その故にお名前は知っていたが、よく懇談をしたり、ましてや一杯やったこともなかったが、そのお人柄と識見については側聞していたので早速手続きをして身近かな所で手伝ってもらうことになったのである。

当時の京都では社会事業の専門学科を持っているのは同志社大学だけで、しかも神学部の一部に位置づけられていただけに、社会事業の専門家は少なかった。

幸い佛大の前身佛専は社会福祉事業法第三章社会福祉主事十八条（資格）にある「専門学校において厚生大臣の指定する社会福祉に関する科目を修めて卒業した者。」に該当することになった。

民生安定所発足の頃数十人の佛専卒が市の福祉を担当し、

僕などは民生局に石を投げると坊主（佛専）にあたると陰口を聞かされたものである。しかし急造の陣容がためには仕様のないことで、勿論私心はなかった。

もっとも社会福祉主事設置に関する法律は同議のものが既に一年程前の昭和二十五年に出来ていたが社会事業法等と共に社会福祉の綜合立法として、社会福祉事業法が出来たことは御承知の通りである。

だから民生安定所という仮名が先行したのは京阪神の三都市で米国式現任訓練が重点的に米軍によって行われ、又三都市の当局もむしろ良いものは逆に取り入れたら良いという積極的姿勢でケースワークを中心にグループワークの仕事の専門化等をその行政組織に取りくんたものであった。

恒川氏には、それに対処する資料集めと内部の現任訓練のお膳立ての助手的活動をお願いした。実に要領よく適格にやってもらった。

そして時々彼と共に東京の代々木の青年会館に何日も泊まって資料を整理し、GHQと交渉したものである。勿論このときの要点は社会福祉従事者の専門化が狙いであったからそれと行政の現実とのギャップをどう処理するかが問題であり、

英語を得意としない僕がジョージ・ホシノ（二世）軍政官と通訳なしで手真似足真似でなんとかやったものである。その頃京都ではミセスパトナム女史が派遣され後には有名なミスデッソ女史が来て主としてケースワークのスーパーバイザーをしてもらった。ミスデッソ女史は退官後京都市民生局嘱託で残って頂いたが、まもなく同志社に招かれて、終生を日本でコツ／＼とケースワークの仕事で養橋ファミリークリニックで奉仕的に続けられ、惜しくもこれが社団法人化した今年初頭に他界された。同志社の大塚教授や市役所退官後赴任した華頂の豊田教授、佛大の須賀・清水の両氏はもっとも中心的人物であり彼女を中心として金曜会という研究会が組織され、恒川氏も職業がら、そのメンバーになっていた。

僕自身も京都市に佛専の先輩である漆葉見龍師に入れてもらったこともあり、終生民生の仕事をするつもりであったが宮仕えの悲しさで市長公室職員課長に引っぱられ、又その因縁で教育畑へ行くことになり、教育長等を十数年もやって、最後には市長の政変もあり、思いもかけず交通局長を二期もやることになった。

したがって「社会福祉」の専門的な勉強はそれ限りになっ

てしまい、恒川さんとも重要なポイントの時だけ逢って話合うことになってしまったが、他面仏教面でのつきあいもありずっとお付き合いさせて頂いた。そして京都市民生局の重要な現場の福祉事務所長を勤められていたが、同じ屋根の下にいた市役所マンからの情報はいつも好評で同志として喜ばして頂いていた。

昭和四十三年彼が市の定年になったとき、故塚本先生から再度指示があり、今までの社会福祉の経験を生かして、佛大へ出講するようお話があった。先輩の秦隆真先生も学長の恵谷先生も双手をあげて賛成で、佛大との御縁が出来たのである。

卒直に言って僕は近代的社会福祉事業への発展過程に於て、たしかに一理はあったが今までの社会事業が恣意的慈善的なものであることが、何か悪いことのように説明されていたが、何か僕には心に残るものがあつた。

それはあだかも仏教的宗教的社会事業が後進的な印象を与えていたが、今や近代社会に於ける社会福祉事業の根本理念の中に仏教的要素が先決条件であることを再確認し、むしろ近代社会福祉事業がその根底に仏教的基盤がなければならな

い必然性を科学的に解明して欲しいと思っていたのである。

この時に当り恒川氏は地道に仏教の原典に還り、その中から真の社会福祉を具現させようと試みられたのは真に敬服に値いするし、その後が続くものが、すっきりと、臆することなくこれからの社会福祉が単なる唯物史観的の帰結の説明でなく、人間性の探究で勝れていた法然的普遍妥当性に基く仕組を打ち立てて欲しいと思うのである。

そのことが彼の研究論文から見ても恒川教授への追善になることを確信するものである。

追記

佛大久保田治教授は当時大阪市民生局の幹部でこの時代に活躍された方である。

「佛教福祉」第七号 目次

Ⅱ特集佛教と老人福祉Ⅱ

無有愛（死への衝動）と自殺

— 原始佛教における自殺観 —

社会福祉労働に対する考察

青年の価値観についての社会学的考察

幼児の事故と安全教育

老人と犯罪

医療組織の構造機能に関する覚書

老年者の栄養と食生活

佛教と老人福祉

中国における老人の生きざま

思うままに

— 医者と坊さん —

北海道開拓期における佛教の役割

現代社会と自由の問題

清風園との出会い五十年

老人福祉の見直しについて

アメリカで見た老人福祉

— エベニーザホーム・ソサエティでの実習より —

杉本卓洲

村上尚三郎

伊藤一雄

花田順信

乾泰正

筆谷稔

中野迺

稲田俊秀

北崎耕堂

早川一光

三吉明

野村博

川添諦信

俣野実之助

菅原寂泉

◆若干残部がありますから、希望の方は当研究所へお申し込み下さい。実費頒布します。一部送料共 一、二五〇円